

私たちが信じることには根拠があるのだろうか： 認識論の出発点としての遡行問題 哲学

根拠なしに物事を信じるのは危険です。証拠もなしに、相手が自分を好きだと考えて告白したり、満点を信じて不勉強で試験に臨んだりしたら、悲惨な目に合うでしょう。

ではあなたの信じること（信念）には、本当に根拠があるのでしょうか。例えば、自分の誕生日が1月1日だと信じているとします。その理由は何でしょう。1月1日だと誰か「たぶん親」から聞いたということでしょう。ではその信念の理由は何でしょう…

こう考えていくとわかりますが、信念1の理由は信念2でその理由は信念3で…という連鎖的な構造になっています。この連鎖には四つの可能性が考えられます。第一は理由付けの連鎖を無限に続けることですが、人間には無理そうです。第二に、理由付けは循環しているかもしれません。例えばあなたは、親から誕生日を聞いたという信念の理由として、自分の記憶は大体正しいということ挙げ、そう信じる理由として前に自分の記憶が正しかった例を理由として挙げるかもしれませんが、この例示自体が記憶に頼っているので循環しています。第三に、究極的な理由「何らかの間違ったような自明な信念」に至りうるかもしれません。しかし、そんな都合のよい信念などあるのでしょうか。最後に、どこかで理由付けが途絶するか破綻するなら、あなたの信念は最終的に無根拠ということになりそうです。

こうした考察を基に、「フィロン型懐疑論」の支持者は、私達の信念には根拠がなく、私達は何も知らない、と論じます。この結論を受け入れる哲学者は少ないですが、この古代由来の懐疑論は、理由付けの構造の問題（遡行問題）を提示することで、「認識論」と呼ばれる哲学領域の一つの原点となっています。

鈴木真 准教授

古代懐疑論の本（金山弥平文学部名誉教授の訳）と認識論のテキストです。



インド哲学って何それ？ インド哲学

皆さんはインド哲学と聞いて何を思い浮かべますか？何も思い浮かばずにこの文章が読み飛ばされるというのが私の予想です。私自身、大学でインド哲学を勉強している、と言うと何それ？と変わった目で見られます。しかし我々の生活の随所に「インド哲学」は溢れています。腹痛でトイレに閉じこもりながら神様仏様…と救いを乞うという経験やお寺に赴いた思い出はありませんか？高校の倫理で仏教やバラモン教をはじめとするインドの宗教について学んだことがある方もいると思います。インド哲学研究室では皆さんの生活に潜む仏教について学ぶことができ、サンスクリット語で般若経を読む授業もあります。高校で世界史を学んだ方であれば、『ラーマヤナ』と『マハーバータ』はインド史における重要語句として覚えさせられたのではないのでしょうか。インド哲学研究室ではタイトルしか知らなかったこれらの作品を読むことができます。ヨガスタジオに通い丁寧な生活を送っている方もいるかもしれません。インド哲学研究室では六派哲学の一つであるヨーガ学派を学び、丁寧な生活はおろか解脱も目指せます。

皆さんの中には、将来の就職に役立つことを勉強したいと考えている方もいると思います。勿論、それも大事な考え方です。その時インド哲学は選択肢として消えるかもしれません。しかし、インド哲学研究室で得るものは、我々の世界を広げ、心を豊かにし、今後の人生では見かけそうにない考え方にも遭遇すると思います。ここでは皆さんが想像し得る以上に多様な思想や文学、論理、文化に出会えます。インド哲学研究室は自分の世界を広げたいという方をお待ちしています。

金山恵妙 学士課程3年

インド哲学研究室の様子



世界を見るまなざしを学ぶ 文化人類学

新型コロナウイルスは世界中の日常を一変させました。当たり前であったものがなくなり、with コロナ時代と呼ばれる新たな日常がはじまりました。だれもが想像していなかった世界が現実となったこの2年、みなさんは何を考え、どのように過ごしたのでしょうか。

なぜコロナ禍のお話をするかという、私がコロナ禍で生きる人々のつながりをテーマに卒業論文を執筆したからです。このような危機に面して、社会や慣習、人々の生活や思考はどのように変容したのか、逆に変わらないものは何か？それらを人と人とのつながりに焦点を当てて研究を行いました。

このように、社会や文化のあり方、人間はどのように思考してきたのか、人間とはどのようなものか、といった問題を考えることを、人類学的思考と言います。その研究対象は、人間の社会や文化に関わるすべての物事です。フィールドワークを通じた人間や文化についての知識の体系化から、「人間とはなにか？」といった根本的で普遍的な追究まで、本当に幅広く、そして奥深い学問です。

文化人類学の視点から研究を行うことに魅力の一つは、研究対象との近さです。データや数値化するのではなく、感情を持ち、思考し、生きる人間を扱うことで、人間の本質に迫ることができます。もう一つは、社会や文化、人間を様々な視点から見つめる研究者として、自分自身の価値観や思考の枠組みまで客観的に捉え直すことが必要とされることです。他者理解と自己理解の反復の中で、他者を尊重・理解する姿勢や自分自身と向き合うことは、世界を見るまなざしや触れ方をより豊かにすると感じています。

きっと、この学問を学ぶと、世界がより面白く、豊かなものに見えるはずです。

熊崎帆乃花 学士課程4年

2年前、愛知県東栄町で行われる花祭りにフィールドワークに行った時の一枚。このように、生で見て肌で触れる経験、その場所で生活している人々と触れあう機会がたくさんあります。



月刊 名大文学部 第126号

隔月刊行



編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2022年3月10日発行